

『更級日記』はいかに摺筆されているのか

金 井 利 浩

二〇二〇——この忘れ難い、パンデミック史上に永く刻みつけられるであろう暦号は、しかしそれとは全く別に、まさに隔絶する文脈においてというべく、かの、東国上総を起点として京へと出立する場面から始まる『更級日記』の、まさにその作者上洛からちやうど千年を数える節目となるそれでもあった、と、いかにも知悉していたかのように言ってしまうては、いささか正確さを欠く。昨年八月、和田律子・福家俊幸両氏から、お二人の共編に係るご芳著の惠贈を忝くした。到来に吃驚しながら開梱し、ふたたびそれに驚倒することになる標題は、『更級日記上洛の記千年——東国からの視座』であった。さっそく繙いた「序」の劈頭の一文、

本年二〇二〇年は、『更級日記』の作者菅原孝標女が、上総介であった父孝標の任期終了にともない、上総を出立し上京の途に着いた寛仁四年（二〇二〇）から千年目にあたる。

これによって初めて、「二〇二〇」年の持つ、あるいは同年における該書公刊の有する意味と意義とを理解したのである。

同書に収められた諸論攷、殊に伊藤守幸氏「『更級日記』における東国の意味——作品の語らなかつたこと——」、倉田実氏「『更級日記』の薬師仏と阿弥陀仏——「東方淨瑠璃淨土の西門」を出て「西方極樂世界の東門」に入る——」、和田律子氏「『更級日記』における阿弥陀来迎夢の意味——乳母願望叙述と物語作者としての矜恃を中心に——」、福家俊幸氏「『更級日記』の内なる東国」に大いに触発された私は、改めて読まずにはいられぬ念いに駆られ、二〇一八年度入学生の3年次「古典B」二学期の、とはすなわち彼女らの高校生活最後のということになるのだが、教材の予定を急遽変更し、『更級日記』の始まりと終わりとを、授業での読みの対象に据え、生徒たちとともに読んでみることにしたのである。以下は、その軌跡の覚書である。

*

*

*

〈I〉あづまぢの道のはてよりも、なほ奥つかたに生ひ出でたる人、いかばかりかはあやしかりけむを、いかに思ひはじめけることにか、「世の中に物語といふものあんなるを、いかで見ばや。」と思ひつつ、つれづれなる昼間、宵居などに、姉・継母などや

うの人々の、その物語、かの物語、光源氏のあるやうなど、ところどころ語るを聞くに、いとどゆかしさまされど、わが思ふまに、そらにいかでかおほえ語らむ。いみじく心もとなきままに、等身に薬師仏を造りて、手洗ひなどして、人まにみそかに入りつつ、「京にとく上げたまひて、物語の多くさぶらふなる、ある限り見せたまへ。」と、身を捨てて額をつき、祈り申すほどに、十三になる年、「のぼらむ。」とて、九月三日門出して、いまたちといふ所に移る。

年ごろ遊び慣れつる所を、あらはにこぼち散らして、たち騒ぎて、日の入りぎはの、いとすぐく霧りわたりたるに、車に乗るとて、うち見やりたれば、人まには参りつつ、額をつきし薬師仏の立ちたまへるを、見捨てたてまつる、悲しくて、人知れずうち泣かれぬ。

...

Ⅱ かうのみ心に物の叶ふ方なうてやみぬる人なれば、功德も作らずなどしてただよふ。

...

Ⅲ さすがに命は憂きにも絶えず長らふめれど、後の世も思ふに叶はずぞあらむかしとぞうしろめたきに、頼むこと一つぞありける。天喜三年十月十三日の夜の夢に、居たる所の家のつまの庭に、阿弥陀仏立ちたまへり。さだかには見えたまはず、霧ひとへ隔たれるやうに透きて見えたまふを、せめて絶え間に見たてまつれば、蓮華の座の土をあがりたる高さ三四尺、仏の御たけ六尺ばかりにて、金色に光り輝きたまひて、御手、片つ方をひろげたるやうに、いま片つ方には印を作りたまひたるを、こと人の目には見つけたてまつらず、われ一人見たてまつるに、さすがにいみじくけおそろしければ、簾のもと近くよりも見たてまつらねば、仏、「さは、このたびは歸りて、後に迎へに来む」とのたまふ声、わが耳一つに聞こえて、人はえ聞きつけずと見るに、うちおどろきたれば、十四日なり。この夢ばかりぞ、後の頼みとしける。

Ⅳ 甥どもなど、一ところにて朝夕見るに、かうあはれに悲しきことの後は、所どころになりなどして、誰も見ゆることかたうあるに、いと暗い夜、六郎にあたる甥の来たるに、めづらしうおほえて、

月も出でで闇にくれたる姨捨になにとて今宵たづね来つらむ……a
とぞ言はれにける。

Ⅴ ねむごろに語らふ人の、かうて後、おとづれぬに、

いまは世にあらじものとや思ふらむあはれ泣く泣くなほこそは経れ……b
〈Ⅵ〉十月かみづきばかり、月のいみじう明かきを、泣く泣くながめで、

ひまもなき涙にくもる心にも明かしと見ゆる月の影かな……c

〈Ⅶ〉年月は過ぎ変はりゆけど、夢のやうなりしほどを思い出づれば、心地もまどひ、目もかきくらすやうなれば、そのほどのことは、またさだかにもおぼえず。

〈Ⅷ〉人々はみなほかに住みあかれて、ふるさとに一人、いみじう心ほそく悲しくて、ながめ明かしわびて、久しうおとづれぬ人に、
茂りゆく蓬よもぎが露にそぼちつつ人に訪たづはれぬ音をのみぞ泣く……d

あまなる人なり。……e

世の常の宿の蓬を思ひやれそむきはてたる庭の草むら……f

*

*

*

授業では先ず、教科書にも載る〈Ⅰ〉について、先に論題を掲出した諸氏の御論、別けても福家氏のそれに勁く導かれながらの精読に臨み、以下のことを逐次確認していった。一つ、作者が自らを東海道の果ての地すなわち常陸国よりもさらに奥で生まれ育った人と規定し、「卑」や「賤」を当て得る「あやしかり」の語によって東国育ちであるという自己の属性が冒頭から見据えられ表出されていること。一つ、父孝標が上総介の後に常陸介を歴任したことに係って、作者が祐子内親王家に出仕した際に、その父の官職名が用いられていた蓋然性が浮上する彼女の候名「常陸」が、冒頭の「あづまぢの道のはて」との表現から直ちに想起される歌「あづまぢの道のはてなる常陸帯のかごとばかりも逢ひ見てしがな」のなかに密かな名乗りとして含みこまれているとも捉えられること。一つ、〈都〉に対する〈鄙〉の地で生育したことがまだ見ぬ「物語」へのあこがれを生成したという逆説的な関係を見出すことができる点、すなわち、文化の一つとしての「物語」の写本など存在すべくもない辺境の地で育ったがゆえに、「姉」や「継母」から聞いた「物語」は、それが「ところどころ」でしかなかったことも手伝って掛替えのない存在として膨れ上がり、「ゆかしさ」はまるで満たされぬばかりか、「心もとなき」思いがむしろ募りつづけるほかなかったのだ、ということ。一つ、そこに、自己を卑しむ志向とは真逆の、「物語」との運命的なつながりが象られたということ、言い換えれば、まさに辺境の地で育ったことが「物語」への熱狂的な愛を支えてゆく、そうした図式の構えを見出し得るということ。一つ、切望する物語入手とそのための上洛の実現が少しでも高い

確度で叶うようにと「等身」に造った薬師仏に向かい、手を洗って身を清め、「人ま」を見計らっては仏間へと足を運んで繰り返されるその祈りのさまが、「身を投げ出して」とも「一心に」とも解釈される「身を捨てて」との表現によって描かれていること。一つ、果たして願いが叶い、本格的な出発に先立っていったん居を移す門出をしたというその地「いまたち」には、「さあ、出発して（京を目指さん）」という意味の「いま、発ち」の含みがあるのだとする、そうした（ことば遊び）の介在をも読み取り得る作品であるということ。一つ、さて段落が改まり、いよいよ牛車に乗ろうとした作者たちを包んで回り一帯に幻想的に立ちこめた霧の中に浮かび上がる薬師仏、この、喜びの旅の成り立ちと引き換えの、大切な存在との別れがもたらす喪失感、それを抱いたまま旅に出るという道程を心の中に形成する主体は、十三歳という少女こそふさわしいと言えるであろうこと。一つ、そもそも木彫りであったか紙製であったか、はたまた壁に描いたのであったか、いずれにせよ「見捨てたてまつる」と表現される手作りの薬師仏との別れは、まさに孤独で多感な少女の心の中においてこそ、その意義が全うされるものであったろうこと。一つ、「人知れず」涙を流し、家族から孤絶した場でひとり告げたその別れは、人が人生において幾つか経なければならぬ試練の通過点のうちの、この少女にとっては最初のそれであったと読み解くこともできるであろうこと、等々。

そのうえで〈Ⅲ〉以下の読みに臨み、先に掲げた伊藤・倉田・和田各氏の御論の援けを再び三たび借りながら挑み、この作品が、確かな構成意識に基づく、確かな表現機構をもって粹取られていることを読み取っていった。

すなわち、〈Ⅰ〉における「薬師仏」と〈Ⅲ〉における「阿弥陀仏」という「仏」の対応・対照、そのいずれをも作者は「霧」の向こうに見たという対応・照応、さらにはまた、いずれにも「一人」で向き合ったという対応を、念のため言い添えておけば、〈Ⅰ〉の文章中には非在の「一人」という語を、「人まにみそかに」や「人知れず」といった表現の中に見出しながら、確認したのであった。

つぎに確認したのは、〈Ⅰ〉にも〈Ⅲ〉にも日付が明確に記されていることであった。

憧れの物語の入手の実現に向けて何よりも必要とされた上洛への第一歩がまさに踏み出された日、それが何にも増して忘れがたかったからこそ「九月三日」は記されたのであったろうが、それと同様に、「功德」を何一つ積み上げることとせぬままに「ただよふ」生に身を処してきた自分を、他でもない「阿弥陀仏」がいずれ迎えに来てくれるという夢はまさに忘れがたく、またこの上なく有難いものであったからこそ、その夢告のあった「天喜三年十月十三日」はここに明記されたはずで、その延長線上に置かれた

〈Ⅲ〉の結びの一文、「この夢ばかりぞ、後の頼みとしける」の持つ意味合いは限りなく大きいと言わねばならず、作者のその後の生は、それ一つに支えられていくことになるのであろう、そう読んでいった。

*

*

*

さて、そうした〈Ⅰ〉と〈Ⅲ〉とのシンメトリックな対応構造をとまって構築されていた文脈を確認しておいて、〈Ⅳ〉以降に配された文章の、プロット相互の接造・構成のありようを、厳しく見つめていった。

果たして、いくつかの事柄が、教室のなかの眼によって、気づきとして見出されていく。すなわち、〈Ⅳ〉と〈Ⅴ〉では、歌直前の地の文、その最後にはどちらにも接続助詞「て」が置かれ、〈Ⅴ〉と〈Ⅵ〉についても、歌の直前、地の文の最後にはやはり共通して、こちらは格助詞「に」が置かれている。〈Ⅳ〉・〈Ⅴ〉で「て」に導かれて詠まれる歌は、したがって独詠だ。一方、「に」によって導かれる歌は、〈Ⅴ〉・〈Ⅵ〉それぞれの相手に対して送り届けられたものだ。そういうことが、「て」「に」から分かる。そういうことが分かるように「て」や「に」が配置され、文章が構成されている。

そのような表現と構成をともなつて読み手の前にある和歌であればこそ、私たちはそうであることを最大限に重視するという立場ないし視点に立って、最終的に、**a** 歌は、「何の必要あつて、こんな真つ暗な夜に、あの甥は訪ねてなんか来たのでしよう」との意に、**b** 歌は、「こんな私は亡きものとお思いでしょうが、おあいにくさま、こうして泣きつづけながらも生き長らえております」との意に、そして**c** 歌は、「泣きつづけて、確かに心の眼も曇るばかりではありませんが、そんな私にも月の光は明るく見えますよ」との意に、それぞれ解するに至ったのであったが、こうして弥陀来迎の夢告に支えられ、〈Ⅶ〉で夫の死の相対化まで果たす作者の筆が、一見、痛恨事ゆえに絶望の淵にたたずむほかない心境を投影したかのような、したがってその延長線上にある不安ゆえの忌避の希求ないしは忘却の誠実な吐露をかたどったものと思われもする「さだかにもおほえず」との文言が、実は省筆を旨として用意されたのではないかと捉え得ることを生徒たちが理解するのに、さほどの時間は要しなかった。

*

*

*

こうして文脈に迎えられることになる擱筆部〈Ⅶ〉に正対するときをようやく迎えるのだが、その理解は、同部の解釈に係る異説三種をA説／B説／C説としてまとめ、それらを単純に併記した次のような内容の資料を配布し、その一つひとつについてそれぞれの理路を丹念に辿るといふかたちで目指すことにした。

A 説・・

(本文の引用省略)

d Ⅱ 作者から「久しうおとづれぬ人」への歌

e Ⅱ 「久しうおとづれぬ人」についての注記

f Ⅱ 「久しうおとづれぬ人（Ⅱ「尼なる人」）」から作者への歌／二句切れ

A 説の通釈例・・

(同居していた) 人々は、皆他所に散り散りに住居を定めてしまったので、(私だけが) もとの家に一人、大変心細く悲しくて、物思いに夜を明かしかね、久しく便りをくれない人に(こんなふう)、

(ずんずん) 茂つて行く蓬の露に濡れながら、人に尋ねてもらえない(悲しさのため) ただただ声をあげて泣いております。

(その相手は) 尼である人だ。

(蓬の露に濡れつつ、人の訪れない悲しきを嘆いていらつしやるとのことですが、あなたの所は) 世の常の住居の蓬ですのね。思いやって下さい。世を背きはてた(私の) 庭の(荒れ放題の) 草むらをね。

〔小谷野純一『更級日記全評釈』(風間書房、一九九六年)に拠る〕

B 説・・

(本文の引用省略)

d Ⅱ 作者から「久しうおとづれぬ人」への歌・その1

e Ⅱ 「久しうおとづれぬ人」についての注記

f Ⅱ 作者から「久しうおとづれぬ人（Ⅱ「尼なる人」）」への歌・その2／三句切れ

B 説の通釈例・・

人々は皆他の所に離れ離れに住むようになり、長年住み慣れた家に一人、たいそう心細く悲しくて、もの思いにふけりながら夜を明かしかねて、久しく便りのない人に、

ただただ茂つて行く蓬の露に濡れながら、人から訪ねてもらえない寂しさに声をあげて泣くばかりです。

その人は尼なのであった。

荒れ果てたといえ所詮俗人のよくありがちな私の家の蓬にどうぞ思いを馳せてください。世を捨てて、私から離れて付き合いを絶っているあなたの庭の草むらから（あなたからのお返事をお待ちしています）▽

C 説…

（本文の引用省略）

d・f は、作者から「久しうおとづれぬ人」への一通の消息（手紙）

C 説の通釈例…

ともに住んでいた人びとは皆よそに離ればなれに住んで、私は長年暮らした家にたった一人、何とも心細く悲しくて、物思いに沈んで夜を明かしかねて、久しく便りをよこさない人に宛てて、

私は、生い茂ってゆく蓬の露に袖を濡らしながら、誰にも訪うてもらえずに声をあげて泣いてばかりいる、かつて、あなたと一緒に宮仕えの苦労を重ねて、涙で袖を濡らしていたあの時の「あま^{海人}」の一人です。

この俗世間のどこにでもふつうにある〈宿の蓬〉に、思いを馳せてください、今では「あま^{海人}」ならぬ「あま^尼」になって、〈宿〉から離れてしまった〈庭の叢〉さん。

さて、かかる資料を参照させつつ、以下のとおり各説の要諦を整理確認していった。

A 説は、d を作者からの贈歌、f を「久しうおとづれぬ人」からの返歌と見、e は、その f に先立って、「久しうおとづれぬ人」がすでに出家していることを明らかにしておくための注記である、とする。

また B 説は、e を注記と見るのは A 説と同じだが、d・f はどちらも作者から「久しうおとづれぬ人」への詠である、としている。

A 説では、f を二句切れである、という。その二句までの意味合いは、「あなたの所は、世の常の住居の蓬ですよ」と諭したものであるというのだ。出家した私の庭こそ荒涼たる草むらである、それをむしろ思いやってほしい、そのように「久しうおとづれぬ人」は返してきたというわけである。

これに対して B 説は、「そむきはてたる」「久しうおとづれぬ人」に対して、あなたから見れば取るに足りない私の暮らしを、そち

〔福家俊幸「更級日記全注釈」（角川学芸出版、二〇一五年）に拠る〕

らの庭の草むらから思いやってほしいと訴え、返信を求めた歌、それが f であるというわけだ。

さてC説だが、当説が改めて着目したのは、d 歌直前の「…久しうおとづれぬ人に」と e のありようであった。a 歌直前の「…おぼえて」以降の、「て」もしくは「に」を承けて歌が詠み出されてゆく、歌の直前のそうした接造のありように鑑みて、e は、明らかにイレギュラーではないか。それがイレギュラーであることは、何を物語っているのか。その直前が「に」であることとの兼ね合いは、いかが相成るのか。そこで考え合わされたのが、消息（手紙）における歌文融合（歌文融通）と呼ばれる文体であった。例えば、『枕草子』に次のような章段がある。

清水に籠りたりしに、わざと御使して給はせたりし、唐の紙の赤みたるに、さうにて、

「山近き入相の鐘の声ごとに恋ふる心のかずは知るらむ

ものを、こよなの長居や」とぞ書かせたまへる。

紙などのなめげならぬも取り忘れたる旅にて、紫なる蓮の花びらに書きてまゐらす。⁽³⁾

見られるとおり、中宮からの手紙は「…恋ふる心の数は知るらむ」の和歌で終わらずに、そのまま「知るらむものを」と続いているのであり、これは、散文である、とも見做し得るのである。清少納言の帰りをひたすらに待ちわびる気持ちの表出を趣意としながらも批難めく、和歌とも散文ともつかぬその表現は、いかにも互いに心を許しあった知的な女性どうしの優雅なことば遊びであり、文体の工夫の発現なのであった。

この文体を、今まさに d e にも見出し得ると考えるとき、『更級日記』は読み換えられる、と考えたのがC説であった。

C説はそこで次には、その「読み換え」に向けた論理を支えるコンテキストとして、『更級日記』そのものの中の次の一節を導き入れるのである。

うらうらとのどかなる宮にて、同じ心なる人三人ばかり、物語などして、まかでてまたの日、つれづれなるままに、恋しう思ひ出でらるれば、二人の中に、

袖濡るる荒磯浪と知りながらともにかづきをせしぞ恋しき

と聞こえたれば、

荒磯はあされど何のかひなくてうしほに濡るる海人の袖かな

いま一人、

みるめ生ふる浦にあらずは荒磯の浪間かぞふる海人もあらじを

作者には、同朋「二人」が存した。「袖」を濡らしながらも「同じ心」で「荒磯」にて「かづき」をした、すなわち祐子内親王家でともに辛苦を味わいつつ仕えた、その思い出を作者が詠み贈ったところ、「二人」はともに「海人」の語をもって応じたというのが、C説は、この「二人」のうちの一人こそ、「久しうおとづれぬ人」その人であると見立てたのである。

さて、そのうえでdゝeの本文を、C説は次のように改修する。

「茂りゆく蓬^{よもぎ}が露にそぼちつ人に訪^とはれぬ音^ねをのみぞ泣く…d

あまなる人なり。…e

世の常の宿の蓬を思ひやれそむきはてたる庭の叢^{くさむら}」…f

そう、dゝfを、一通の消息と見るのである。先の、『枕草子』の実例のように。これを受取り読みはじめる者は、韻文の律動を感じることになるだろう。もちろんそれは、冒頭から「音をのみぞ泣く」までが和歌の韻律に一致するからである。しかし「泣く」では終わらずに、「あまなる人なり」に出会い、その地続きの意味合いを考えることになるだろう。かつての朋輩たる書き手からのその文面は、彼女の目にいかに映じたであろうか。いつも涙で袖を濡らしていた「過去」を呼び覚まさせ、過去と変わることなく涙に袖を濡らしているという「現在」をも知らしめるその〈散文〉は、長きにわたって音信を途絶させてきた受取り手に対して、作者からの挨拶の役割を果たしつつ、それ以上の意味合いを誘発するであろう文言である、とC説は言うのである。

要するに、C説は、eを、注記とは見ない。「あま」は、まず何よりも、かつての同朋たることを象徴的に表象する符牒であり、

その内奥で、一つには、なおも袖を濡らす「海人」たる詠み手の〈いま〉を定位し、もう一つには、「そむきはて」て既に「尼」となっている受取り手の許に届いた時点でその者の〈いま〉を問いかけもする、いわば仕組まれたことばなのであった。そういう「あま」を含む「あまなる人なり」を経て、最終歌は届けられ、読まれる行文だったのである。

その最終歌は、「世の常の」と「そむきはてたる」、「宿の蓬」と「庭の叢」との対称が、実に際やかである。「宿」と「庭」という分ち難く結び合うことばを冠して、「蓬」と「叢」という同位・同列のことばに自己と相手とをそれぞれ喩え得たのは、C説の論理に従えば、あくまでも両者が、かつての同朋だったからである。

果たしてC説によれば、この作品は、「世の常の」、すなわち俗世間の一般の暮らしぶりにとどまる作者が、「そむきはてたる」、すなわち出家しおおせて俗世間との交わりを絶った、ゆえに「久しうおとづれ」なくなった「人」に宛て、お互いが「おなじ心」を分かち合った者どうしであればこそ理解可能な言葉と文体とを用いて、それぞれが過ごした時を経て今そこにある生を、ともどもに確認し合えることを望んでいたためた、そのような消息文で閉じられている、ということになるのであった。

*

*

*

引き合わせは、文章量的には、はしなくもC説に偏重する恰好になったが、これはしかし、或る意味では、生徒たちの、A・B両説に対して覚えた違和感を、C説ならば雪ぐ^{すす}ことができるのかという、生徒への挑みのありようそのものでもある。

すなわち、生徒たちは、二句切れ／三句切れの当否に対して精確な判断を下すまでの知識・才知こそさすがに持ち合わせなかったけれども、A説については、たとえば、A説が説くようなdの歌に対して、同じくA説の説くようなfの歌が返ってくることの違和、また、そのようなfの歌でそのまま作品が終わってしまうことへの疑問、さらには、何らかの事情によつて執筆が断止したままになつてしまったのだといったような説明に対する抵抗と言つてもよいような不納得等々が反応の中にはあつたし、一方のB説についても、相手である「久しうおとづれぬ人」の庭を「草むら」と見立てる謂^いわれはどこにあるのか、あるいは同位・同列に扱ったのだとして、そう扱い得る根拠ないしコンテキストはどこにあるのか、といった疑問、さらには、d・fともに作者からの歌であるのに、なぜ注記がその間に割つて入るようなことになつてしまったのか、それならばむしろ、たとえばdの前に、「久しうおとづれぬ、尼なる人に」といった書き方がきたらうし、それこそが自然ではないか、といった不審が示され、また、最後の閉じられ方に鑑みて、作者はほんとうに返信（返歌）を求めているのだろうか、といった疑義も呈されたのであった。

念のため言い添えておけば、C説が授業担当者の一人である金井の旧稿(4)に基づくものであることは授業の最後まで明かすことはしなかったが、そのC説とて、『更級日記』総体の理解を歪めぬ保証など、むろんどこにもない。ただ、授業担当者としての金井は、C説が、描かれた「孝標女」のアイデンティティーに歪みや分裂をきたすことなく最も滑らかに一つの像を結ぶものと考えている。

いったい、人が人に、かく生きるべしと振りかぶり説きふせるのではなしに、親しみをもつて温かく注ぎゆく心の琴線、それは、出会いや喜びや愉しみといった温かなものたちの対極にある、別れや辛さや苦しみといった冷ややかなものたちをもしつかりと受けとめてきた者こそが抱え得るものと考えられるだけども、そうした「温かなもの」と「冷ややかなもの」とをともども味わう／味わったことを平凡な生活と呼ぶとして、作者の用いた「世の常」の表現こそは、まぎれもなくその「平凡」の謂いであつたろう。

そういう表現を使うことのできた作者は、薬師仏に願ひ、阿弥陀仏にすがる自己を、あるいは望んでしまう、寂しさや悲しさに打ち沈んでしまう自己の「弱さ」を、決して秘すことはなかった。自己の物語への憧憬・耽溺に係る、あえて今日的にいうなれば黒歴史を、齢を重ねてなお断ち切れてはいぬ、もつと言え、**「物語」**を信じて已まぬのが心性を、実は率直に露呈せしめていたとも読めるだろう。作者は、言い得べくんば、あるがまま、なのであつた。過去のありのままを受け入れ、今があるがままに生き、これからまた、あるがままに「ただよふ」ばかりだ、というのである。自分を生きていくのは自分である。他人ではない。その意味を知っていたのが『更級日記』の作者であつたと言ってもよいだろう。自分が自分を生きていくのと同様に、人もまたその人を生きてゆくその真理を、夫を失ひ親族に去られ、ありとある辛酸をなめ悲哀を味わつて、たつぷりと悟つていたのが彼女であつた。したがつて、あの最後の場面には、作者の、「久しうおとづれぬ人」への負い目も引け目も無ければ、羨望も期待も無い。むしろ、それぞれの過去や宿運を背負つて今を生きるお互いは、そのままそれぞれを生きていけばよい、それがあの「宿の蓬」と「庭の叢」という同位・同列表現に込められた意味合いであつた、と読むのだが、いったい「庭の草むら」という表記を踏襲してきた掉尾の一首の結句のそれを敢えて「庭の叢」に作ることで右の意味合いを象徴的明示的にかたどつたC説が、かくして「孝標女」を最も滑らかに説明し得る、そう考えるのである。

ところで、授業中、私はゆくりなくも『阿弥陀経』の説く「俱会くゑい一処いつしよ」を想い起こしていた。離ればなれになつた者同士も、西方浄土では再び会えるとの教えが、彼女には信じられていたのではないか、最後の消息文は彼女のそうした思いに裏打ちされているようにも思えたのである。

最後の授業を了え、課題として提出を求めた振りかえりシートに、「『更級日記』って、『東』から始まって、最後は西方を向いてますね」としたためた女子生徒の明敏な理会を多すると同時に、経た授業の無駄ではなかったことに一縷の安堵を覚えたことであった。

なお、最後に付けたりを述べておきたい。

『更級日記』が、諸氏が説き来たったとおり祐子内親王その人や配下の女房たちに読まれることを前提として書かれたのだとして、また、冒頭の「あづま路の道の果て」なる表現に、当の内親王家に作者が仕えた際の候名「常陸」がひそめられているのだとして、いま、それとちよとど対を成すように、この欄筆部でも、かつて同家に仕えた同朋に宛てた消息文によって作品を閉じるというかたちで同内親王に係る文脈が敷設されていたのだとすれば、右の「前提」の蓋然性はさらに高まるものと考えられるであろう。

〔注〕

(1) 和田律子・福家俊幸編『更級日記上洛の記千年——東国からの視座』武蔵野書院創業百周年記念論集（武蔵野書院、二〇二〇年七月二〇日）。同書は、所収論攷・寄稿文の充実に

加えて、カバ―に宮城県仙台市出身の日本画家・太田聰雨（一八九六―一九五八）筆の《更級日記》（一九四二年作）を採り用い、帯には孝標女が上洛に向かったその出立ゆかりの地である市原市の小出讓治市長の推薦文を掲げ、付録DVDには「市原市国分寺台区画整理前原形測量図」を収め、さらには、カバ―に用いられた絵をそのまま裏に刷った絵葉書までもが添えられた、千年記念への思い溢れる、素敵な大冊である。

(2) 以下、『更級日記』本文の引用は御物本『更級日記』（複製本）に拠り、私に漢字を当て、句読・濁を加点するなどして掲出する。

(3) 引用は、便宜上、松尾聰・永井和子校注・訳『枕草子』（新編日本古典文学全集18、小学館、一九九七年）に拠った。ちなみに、同書では二二五段である。

(4) 拙稿「たったひとりへの自恃、あるいは『海人なる人なり』——『更級日記』欄筆部私見——」（中央大学文学部『紀要』文学科第八一号、一九九八年三月）ならびに「『更級日記』の終わりは仮名消息である——歌文融通文体へのまなざし、もしくは『源氏』を書き継いだ身物語——」（『教育・研究』第二四号、二〇一一年三月）である。

(5) 常陸が候名であった可能性への言及については深澤徹『都市空間の文学——藤原明衡と菅原孝標女——』（新典社、二〇〇八年）が先行し、また、『更級日記』が祐子内親王家での享受を想定して書かれたことへの論及については土方洋一「中宮彰子の文化圏と文学世界」（桜井宏徳・中西智子・福家俊幸編『藤原彰子の文化圏と文学世界』武蔵野書院、二〇一八年）もあるが、福家俊幸『更級日記全注釈』（角川学芸出版、二〇一五年）の「解説」は、蓋然性を厳しく見極めるべく諸点への目配りは委曲を尽くして間然するところなく、すぐれて説得的である。